
ファンタジーな世界に飛ばされて

～～クラス全員みんなで来ちゃいました～～

野々村イチゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーな世界に飛ばされて ～～クラス全員みんなで来
ちゃいました～～

【ISBN】

27428Y

【作者名】

野々村イチロー

【あらすじ】

剣と魔法が行き交う世界にとばされてしまった

とある中学校の3年C組の生徒

魔法や剣なんて夢のような世界だ

なんて言つてゐる場合じゃない

ここにはお金を稼いでくれる父や

家事をこなしてくれる母などはいないのだ。

生き延びるために自らお金をかせぐしかない！！

とある者は剣をとり魔物を葬る冒険者ギルドに入り

ひある者は兵士に志願したり

とある者はとりあえず町のパン屋で働いたり。

これは少年少女たちが自立して生き延びようとする物語である

序章 プロローグ

オッス！オラ 中山ヒロキ

なうんか 知らねーけど

変な世界に来ちまつたんだ

みたところ小さな村のようでよ

来ている服も中世の外国みたいな布の服。

よくわかんねーけどよお

ワクワクすつぞー！

プロローグ 旅立ち

「くわー修学旅行のバスはどうだ?、おくれちまうさしゃねーのか
あ?ー!」

俺は中止ロキ

エリートでもこる普通の中学生

強こて違ひといひをあざるとすれば

異性が少し苦手つてことカナー

かなり急ぎ氣味に大型バスの駐車場を走る

するとクラス全員がのっこりんでいるバスをみつけた。

俺は遅刻をバレないよう乗り込んでいる列にわりこんだ。「ふー。
危ない危ないと」

無事バスにのっこめた

バスの中じんピシャ乗り込めりやあ先生バレやしないだろ?。

僕はさっそく眠ろうとした、会話はない。
たまたま一人席だったのだ。

「みなさーん注目してくださーー」

かわいらしい声がバス内のスピーカーから響いてくる。

ふとみるとバスガイドさんがマイク片手に笑顔をふりまわしている。

（ウホッ！　いい女…。）

「今日はみなさんに悲しいおしさがあります、泣かないでくださいね」

イイ女だが、なんだこのノリ？

誰か修学旅行というイベントを休むのか？

「このバスに本来乗るはずの先生が風邪を引いておやすみになっちゃいました」

「ヒヤッホーーーーーー！」

「イエYYYYEEEEEEEEEEEEEAA————！」

「ハツハーツハツハツハツハツハ————！」

クラス中に歓喜の声があがる。

先生という法律が無くなつたことで

お菓子をたべまくつたり

ゲームをしたり

とにかくバスの中は学生にとっては夢の無法地帯となる。

「まつ先生がいなくてもバスは出発しちゃいます。
それではしゅっぱーつ しんこー」
なんやかんやで総勢30人のを乗せたバスは京都に向けて出発した。

ファンタジーな世界に飛ばされて ～～クラス全員みんなで来ちゃいました～

小説家のタマゴー！

になれたでしょうか？

色々な感想や意見をいただけたらうれしいです。

ファンタジーな世界に飛ばされ——～～クラス全員みんなで来ひやいましたー

れて、俺は改めて寝るとじょうか。

昨日の晩。

ワクワクしそうで寝れなかつたとは口がやがても言へねえぜ。

つつと。むりくり寝をしようとしたら//トーレー越しに運転手がこつ
ちみてるじやねえか。

目があつてしまつた

「やらないか

「結構です」

俺は異性がちよつと苦手なつけて立派なノンケだからな。
まあこのオッサンは要注意だな。

100%ここつまノンケだつてかまわねえで食つまつやひだら
う。

俺はそやくせと黙つてついた。

～～30分後～～

「ふわあ～～」

よく眠つたな。

バスの揺れを感じないとなるともう着いたのかな？

「田を覚ましたかね

ん？

聞いたことのない老人らしき声がある
あれ？ こひばどじだ？

びつやら俺はベッドに寝かされてるひじい。
しかもなぜか昔の洋風の部屋の中で
着ている物も違うのに気がついた。
制服ではなくこいつのまにか中世の外国のような服だ。

「君たちひま分記憶がないだろ？ けど話しておくれとすますよ」

記憶がない？ 何の話だ？

つていうかこの田の前の老人は
どうみても外国人なのに俺たちと同じ言葉をしゃべりやがる。こ
つたいどうなつてんだ？

「あのひ、こひばどじですか」

多分言葉が同じなら通じるだらつと試つてみる

「そうだね、君は記憶を無くしてからずっと今まで氣絶していたか
らねえ」

氣絶？ 俺はバスの中で眠つていただけだが？

「この老人の言つてゐる」とはまったくわからん。

「まあ、こゝはどこかだよね、

こゝはガルガンダシア中立共和国の城の救護室だ」

「ガルガ……何？」

「ガルガンダシア中立共和国」

ガルガンダシア共和国だと？

そんなとこりの世界地図にのつていたか？

「あの・・俺の記憶がないつてのは、いつたいなんなんです？」

「国のこととも気になるがとりあえず
記憶がないだの言つている老人にきく。

「ああ、こゝの世界のこと全てわかんないんだつけ、そりやあ記憶が
無いんだもんな。」

「どういですジジイ

いいから説明しやがれ。

「いいかい？君たちはソフィアの光をまともに浴びたんだよ。」

ソフィアの光？

またよう分からん単語が出てきた。

「ソフィアの光とは100年に一度、天からきまぐれに射してくる光のことさ。

この光を浴びると、浴びた者は記憶を無くし、どこか違う地域にワープしてしまう。」

俺にはしっかりと記憶が残っているがな。

「しかし、実は悪い」とばかりでは無いんだよ。
ソフィアの光を浴びた者は普通の人間以上の力を發揮できる。
つまり、大人三人を子供一人で軽くのしちゃうことができるみたいな」

ほほうつまり俺はスーパーマン？

けど大人三人つて武術に精通したものなら余裕なんじやないかな？
「まあ所詮人間だからね、村を壊滅させるほどの力は無いよ。」

「それとこの世界の説明もしどうか、どうせ忘れたんだろう？」

だから元々この世界なんてしらねーよ。

「この世界の通貨はガル。

そして稼ぐ方法はまあ働くだね。」

ガルかいつた「こ」はどこの国だ。

「そして働く方法だけど、君は若いからギルドに……」

「先生、彼には自分から説明します。」

「おお！君はケンタ君じゃないか！」

そうかそうか、いやー15人に同じ説明をするのは飽きてしまって

なあ、じゅふりこへ頼むよ

そつ言つて先生とよばれたジジイは部屋を後にした。

「ケンタ?」

「よおうひロキ、元氣か?」

なんかちゅつぴり《じいじ》みたいな雰囲氣のする背の高い少年小沢ケンタがやってきた

無論、同じバスに乗つていたクラスメイトだ。

「元氣か? つて元氣は元氣だけど
いつたいこにはなんなんだい?」

わけのわからんジジイに聞くより早いだらう。

ケンタはうれしそうに説明を始めた

「なんなんだつて? そりやあここは異世界だよ! ?」

.....ハイ?

「す」「よこの世界! だつて魔法使いつとかいるよー。
あと剣士とかモンスターとかもいるんだつてー!」

理解ができない、アレ修学旅行は?

ケンタはうれしそうに説明をした。

どうやら異世界といつのまほ本当らしい、そして自分だけ一週間も田

を覚まさなかつたこと（寝てたからか？）

一番最初に目覚めたのがコイツだつたこと、環境適応能力が高くてたすかつたぜ。

それと俺を含めてクラスメイトはこの城に15人しかいなかつたこと。

城の中庭に裸同然で倒れてたそつな。

国王が保護してくれてた事

他のヤツらは自由気ままにこの城で過ごしていなじ。

だが

「国王はとてもいい人だけどこの国は貧乏だから15人も養つていけないんだってつまり俺らには働けつてことか。

「だけど冒険者ギルドの寮に入ってくれるつて！一週間後みんな冒険者ギルドに登録するんだ！」

俺らに戦いの技術なんかないぞ？

「だからみんな誰かに戦闘の技術を習つてるよ。

ホラ！あそこでケインズ兵長に槍の手ほどきを受けてるでしょ！」

ケンタの指した方向、広い中庭で槍をふるつているクラスメイトが見える。

ケインズ兵長と呼ばれた体格のがつしりとしたオッサンは熱心に槍の訓練をしている。

「ちなみにケンタは何をつけてんの？」

のんびり屋のコイツのことが気になった。

こいつは虫をいじれないほど優しい性格なのだ、いったい何をするのだろうか？

「前平」「一キ」とこっしゃる「前平」プリーストと軽めの剣の稽古だよ。」

プリースト 僧侶的なポジションか、つてことは魔法がつかえるのか？

「魔法・・使える？」

「もちろんー、ちょこっとかけてあげるよー。」

そういうと彼は俺に手をがぞし

「クラシオンー！」

そう言い放つと俺の体に青い光が舞い散る。すげえ気持ちいいが

「俺いま怪我してないねんけど

「アハハハ、つかえたんだからいいじゃん！」

俺もいくつか、魔法をつかってみたい。俺はこの世界にドキドキしてきた。

ファンタジーな世界に飛ばされ
～～クラス全員みんなで来ちゃいました～

子供みたいな文章力ですみません

これから努力していくのでどうかよろしく！

あと魔法名とかのアドバイスや技の名前を募集しちゃいます

特徴と名前を書いて感想に！

どうかよろしく

「」の世界での生活3日目（前書き）

登場する人

小林ケイタ マジックフェンサー（魔法剣士）

特徴 口リ顔の美少年 小柄 どちらかといふと剣より魔法。

ミリア ガルガンダシア魔導士 25歳 女

「この世界での生活3日目

俺はこの世界にやつてきて

この世界の事を色々知ることができた。

この世界には冒険者のためのギルドがあつこちの町や城下町にあることを知つた。

冒険者とは剣や魔法で獰猛な生物を狩りそれを仕事にしている者である。
まつ平たく言うと賞金稼ぎみたいなもんか。

この世界では多くの若者が冒険者にあこがれるが、命の危険と、戦いという重労働に耐えられなくなり、挫折してしまつ者も少なくはないといつ。
そういうえば俺らのクラスは総勢30人。

なのにガルガンダシアに滞在していたのは半分の15人

多分、同じバスの中にいたんだ、この世界にいることな間違いない
だろうが
さすがに心配だなあ。

まつ そんな心配をしている暇があつたら覚えられるだけ
魔法を覚えたいたな。

俺は今クラスメイトの小林ケイタと一緒に

ミコアさん、魔法のレクチャーを受けてこる。

ミコアさん、お城の魔導士部隊の女性にして、凄腕の隊長さんだ。

隊長みずから訓練を行ってくれるのは。
やさしいガルガンダシア国王のはからいと。
ミコアさんの「」厚意だそつだ。

ちなみに俺の職業（仮）は

マジックフォンサー

つまり魔法剣士だ。

俺一応元剣道部だったし

魔法と剣を同時に使えたなら良いなと思った。
しかしこの職業。

小林とかぶつてしまつたが

どうも小林のほうが魔法が上手のような気がする。

まあ俺には剣術もあるからいいや。

「フロストゲイル！…！」

「っは！」

小林が氷の広範囲の魔法を唱えながつた。

や、やめ……

「スマンスマン、中止」

ショートボブで小柄な少年が平謝りをする。
顔は少年寄りの少女といったところだ。

いわゆるショタ

小さくして危ない魔法をガンガンためすその勇氣。

俺にはできねえ、完敗だぜ。

その様子をミリアさんがほほえましく見守る。

お母さんみたいだな。

・・・いや・・違つたな・・

ミリアさんが、小林を見る目はそれとは違つ。

あつ！ 分かったゾ！

あれは愛する人を見る目だ！

つまりミリアさんは小林くん「〇／＼」のフラグを立てている。

ミリアさん、少年溺愛主義
ショタコノ
だつたなんて……

俺は心の中でミリアさんを応援した。

あの小林を落とすのは難しいぞ。

なんていつたつて純粋（多分）な少年だからな。

ちなみに俺は魔法剣の特訓中だ。

魔法剣とは剣に魔法を纏わせて戦うマジックフォンサー特有の技術。

簡単になると剣に炎をまとわせて

どこかのゲームさながらに斬撃をくり出せる。

魔法や魔法剣で華麗に戦闘を導いていく。

カツ「よくないっすか？

元剣道部のかいあつて、剣の扱いにはなれていって。

すぐショートソードの扱いにも慣れた。

剣になれているのかこの3日で覚えた魔法剣は3つ

一つ、『バーンブレイド』

炎の斬撃。うん。

魔法剣の基本中の基本。

そのため熟練の魔法剣士のこの技は威力がすさまじいらしい。

二つ、『Hアロサイス』

剣に魔力を込めながら、おもつきり、切り払う。

ヒュバツ！

つと、真空の刃が剣の軌道から放たれる。

かなりに使いやすいが威力はそこそこ。
だが十分殺傷能力はあると思つ。

ちなみにこの技は剣を使用しなくても放てる『サイス』という魔法
があるが。

剣技のほうが技の威力が若干強い。

三つ、『ワールウィンド』

覚えたての広範囲風魔法。

小型の竜巻お起こして攻撃するのだあ！

どうやら俺には風の魔法が向いてないようだな。

そういうや、なんでこの世界でこんなに早く魔法をつかえたんだ？
体の中に不思議な力、魔力というのか？
があるのが分かる。

なぜ自分で理解できているのか分からない。

やつぱり、あの『ソフィアの光』を浴びたからなのか？
(俺はバスの中で寝ていたし、クラスメイトに聞いても覚えていないといつ。)

まつ、使えるだけラッキーなのかな？

今日も多分訓練で一日を過ぐすだろ?な。

明日にでもクラスメイトが何しているか見に行つてみるか。

どうでしたか？

マジックフォンサー（仮）
とこの名の魔法剣士。

次は多分魔導士系の職業をだしたいと思います。

なにか職業や技の名前でアドバイスをいたたければと思います。

どうぞ次回もよろしく！

1Jの世界での生活 7日目（前書き）

今回は男子全員書いてみました！

なかなかイメージがわきませんね。

しかも名前もありふれた名前で申し訳ありません

一人一人個性的？な感じ

今後はヒロキ以外一人一人の視点で書くかもです。

（職業紹介）

マジックフェンサー（魔法剣士）

ガーディアンナイト

アーフメイジ

プリースト

ライトブレイバー

サムライ

ウイザード

四日目／この世界での生活

今日で城での訓練は終わり。

つまり、ギルドに登録しきつてこいつた。

これからは自分で金を稼いで

自分で飯を喰らう。

王様はいつでも城に来いと、皆の前で言つていた。

この2週間（俺は1週間寝てた）で王様はみんなの父親みたいな存在になつていた。

城下町ことじまるといつのに涙を流していたのだ。

（おこおこ…）

ミロニア師匠はいつでも訓練におこづかと言つていた。

（小林に特に強く）

いつでもクラスメイト15人は

顔パスで城に出入りできるようになった。

さて、今俺はギルドにやつてきてこる。

が、クラスメイトの女子6人のうち4人がいない。

「どうやら女子には戦いは向いていないようだ。

一人はパン屋に住み込みで働いて。

一人は町の薬草園（おそらく元園芸部だらう）

アレ？ もう一人は何処か？

「一人は酒場でウェイターとして。
もう一人は魔法鍊金術を城で勉強してるよ」

答えてくれたのは

親友のミナミ、女じゃないよ男だよ。
決して『たつちゃん、甲子園に連れてってね』
なんていう美少女ではない

「やあ、ミナミさん。『きげんよう』（甘ったるい声）

「おはよ。」

「つみみ無しかよ！」

これじゃあコレが普通になっちゃうだろ！――

みなみは「？」といったかんじで「おを見てくれる。

「わあ～て私ヒロキのファッショントーリック～」

「へへ？」

「今日のパーーティネイトはぱつぱつですね!!ナ!!わざ

「…………」(ミナミは様子をうかがつてこる。)

「！」のキツネの付け耳ですか？似合つてますの～

ふざけてこむのか分からんが、頭にのつかつてこむソレが氣になる。

「……コレ本物」

「ハイ？」

「コレ本物なんだよ」

「いやいやいや

人間にそんなものあるかいな！～

「

「実はシッポもあるんだ」

ヒヨイツ と後ろを見せてくる

なんか……

黄色いフサフサがついてますけど

いつたいどうこう……

「ユウちの世界にきたときからあつたの」

「あつたのじゃないでしょ！
このおばか……」

クラスメイトが大変なことに……

確かに剣と魔法の世界では、猫耳少女とか
ドラゴンのハーフとか

いるよ！

けどお前は元々人間じゃん！

「ユウちの住民じゃないじゃん！

「いつたい……どうしたというのだ……」

「……似合つでしょ」

あつ。 うれしいんだ……

うん。 よく映えていると思うよ……

～ギルド内～

「登録ありがと」やこおした、お部屋は向かいの建物の611室になります。

お食事は一階の「ルートおじさん」の食堂、または六階にあるバーでお召し上がりますよ。」

「おお、どうせ。」

ようやく部屋に入れるな。

思つてたよりギルドの建物は大きく、寮もまたかなり大きい。

しかもBARつきやぞ！

この世界には未成年の飲酒は禁じられていない。
さつやくクラスメイトの一人が行つてしまつた。

「今日はまだ午前中だしなやく依頼がなんかこなしてみるか。
やつ思つた俺は剣を腰にさし部屋をあとにした。」

まず向かうはギルドの受付に

「全速前進DA！」

～ギルド内部～

わざわざ簡単な依頼はつと。

おろ？クラスメイト男子が集まつておるぞ？
「ねえミナミ、いつたい何の相談？」

「おつ丁度ヒロキもあたことだし、わざわざやらないか？」

「だからなんだつてばあ」

「賞金が大きい依頼、みんなでやわらかって話」

そういう事か！

みんなちゃんと武装してゐる。
準備はよくなのか。

「ヒヤッハー　俺の血が騒いでるぜ」
テンションが高いのは小暮マサキ。

黒いマントを羽織つてゐる。

武器は先端に琥珀色の石が埋め込んである漆黒の杖。

どうやら彼はアーヴメイジなそつだ。

「ボチボチやるかのう」

じいじ（ケンタ）とコーキ
二人はプリーストな方々は

じいじは白のマントにメイス（剣はどうした？）
コーキは蒼の服にレイピアという軽装。

「（モグモグ）っぷはー。うめえなー。このメシーー。
あそこでメシを喰らつているのが、つってアレ？
あいつセツキBARに行つたはずじゃあ？

しかも鎧着てるし……

奴は一応紹介しておく

カズキ 遊び人兼ガーディアンナイト

うんゴリラなおまえにはピッタリだゾ 軽鎧に、槍か。

でミナミはといつと

短剣と曲刀の2刀流

彼はライトブレイバー

圧倒的な手数で敵を翻弄する。

一人丸腰の奴を発見した

「そんな装備で大丈夫か？」

「ん~? 大丈夫だよお」

と言つて蒼紫のローブの内側から本をとりだした
「コレあるし」

本でどうやって戦つの君?

だめだこれはだめだ、うん

見なかつた事にしよう。

「ヒロキ初めての仕事たのしみだなあー! オレ、ワクワクしてきた。」

大振りの刀を腰にさしたサムライが話かけてきた。

彼はユースケ。同じ元剣道部だ。あつ! カズキもか。

何故この世界にサムライがあるんだろうか?

そこは気にしないのに限るな。

にじてもやつぱりサムライか。さすが剣道部副部長。

だがこの世界だとどう見ても浮いた存在だな。

なんか、こう、何かが違う。

サムーライみたいな。

三度笠にブーツ。白い袴に青の胸あて。

縞合羽だつたら確實にシン。

小林「みんなそろつた事だし、さっさとしゅっぽつしちゃいましょ！」

このメンバー、大丈夫かな？

多分…大丈夫だ問題ない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7428y/>

ファンタジーな世界に飛ばされて　～～クラス全員みんなで来ちゃいました
2011年11月24日19時54分発行